

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇一〇年二月四日 実施

国語問題

(五〇分)

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

* 字数の指定がある場合は、句読点をふくむこととします。

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

ひらめきについては、^A多くの誤解があるように思います。まず挙げられるものは、ひらめきはある種の天才にだけ起こるもので、発明家や、科学者、芸術家といった特殊な職業の人々の特権である、という思い込みです。

実際には、誰にでもそれと気づかずにいるたくさんさんのひらめきがあります。「ああ、そうか」と世界について新しい何かをつかんだ時に、私たちはまた一つひらめきの階段を上っているのです。

次に多い誤解は、ひらめくためには、考えることを脳に強制し無理やり何かひねり出す必要があるのではないかというものです。しかし、実際にひらめきやすい環境^{かんきよう}というのは、脳への強制とは無縁^{むえん}で、全く正反対のものなのです。

脳は、どんな時にも常に自発的に活動しています。生きている限り、心臓が決して止まることがないように、脳の神経細胞^{しんけいさいぼう}も、ぼんやりしている時も眠^{ねむ}っている時も、全体としては一瞬^{いっしん}も止まることがありません。強制して活動を促進^{そくしん}させるよりも、むしろその活動をいかに抑^{おさ}えるの方が難しいのです。

ひらめきが生まれやすい環境とは、脳がリラックスできる状態のことなのです。[※]極言すると、ひらめきは、脳に対する抑制^{よくせい}をはずしさえすれば勝手に起こってしまうものなのです。

松下幸之助^{まつしたうけのすけ}さんは、「松下電器」の創業時代、まだまだ⁽¹⁾マズしかった日本にモノをあふれさせようと、「水道哲学^{ていどうがく}」を唱えました。私たちの脳はひらめきにあふれています。水道の蛇口^{じやくちゆう}をひねればどこでも水が出てくるように、

問題は、そのような自分の潜在能力^{せんざんりき}に気づくかどうかという点にあると言えるでしょう。何よりも、ひらめきは一部の特権的な人たちだけがもつ能力であるという思いこみを払拭^{はらふしき}する必要があるのです。

ひらめきは、リラックスすることによって簡単に引き起こすことができます。

私が、そのことを説明する時にしばしば持ち出すのは、京都の東山^{ひがしやま}にある銀閣寺^{ぎんかくじ}から南に下る「哲学の道」の話です。「哲学の道」は、近くに住んでいた哲学者・西田幾太郎^{にしだきたろう}の散歩コースでした。西田がここを歩きながらよくインスピレーションを得ていたことから「哲学の道」と名づけられました。

私も京都を⁽²⁾オトズれた時、そこを歩けば何か良いアイデアが浮かぶのではないかと^Cよこしまな考えを抱^{いだ}いて、たびたび歩いたことが

あるのですが、^Dそうしたことはこれまで一度もありませんでした。私は西田に比べて^E「^F」が悪いのかなあなどと思ったこともあったのですが、ある時ふと気づきました。

過去に自分がひらめいた瞬間がどういう環境であつたかを反芻^{はんろう}していたのですが、そうした瞬間というのは、自宅から⁽³⁾最寄りの駅に行く道や、いつも歩き慣れている道をリラックスして歩いている時がもっとも多かったのです。歩き慣れていない京都の「哲学の道」を歩くと、私は⁽¹⁾と周りの風景に目を奪^{うば}われてしまつて、脳がリラックスできなくなつてしまします。つまりリアルタイム・オンラインで、時々刻々と周囲から入ってくる情報の処理に脳が手いっぱいの状態になっている。そんな時にひらめく余裕^{よゆう}はさすがに誰の脳にもありません。

要するに、西田にとって東山のその道が「哲学の道」であつたというのは、西田がそこを毎日散歩し、リラックスできる道であつたからこそ、というわけです。東山のその道そのものに何か特別な仕掛け^{しかけ}があつたわけではありません。

つまり、ひらめきやすい環境というのは、外部からどういったインスピレーションが与えられるかではなく、いかに自分の脳がリラックスできるかということが大事なのです。毎日自分が通っている道が、すべての人にとって「哲学の道」となるわけです。

なーんだ、と思うかもしれませんが、^F「ひらめき」のためには特別な環境や、才能は必要なく、ただリラックスすることが必要である、という事実^Gに目覚めるために、「哲学の道は特別な道ではない」というこの話は、とても大切なメッセージを含んでいると思うのです。

「哲学の道」のエピソードは、ひらめきについて重要なことを教えてくれます。ひらめきを外の環境から促進させることはできないということです。むしろそういった外部からの情報は、ひらめきにとってじゃまになってしまふ。いかにリラックスした状態を作り出すか、脳に空白をつくるか、このことこそが重要なのです。

よく、この絵をみると、あるいはこの音楽を聴くと、インスピレーションが湧^わいてくると言う方がいますが、これもそうすることです。リラックスができるから、脳に空白をつくることができるから大事なのです。その絵や音楽の「情報」自体に、ひらめきを促^{うなが}す特別な性質があるわけではないのです。モーツアルトの音楽でも、それを聞いてさえいればひらめくというものではないでしょう。むしろ、モーツアルトの音楽がもたらす「麗^{うつく}しいリラックスという空白」がひらめきを促すものと思われまふ。

自分が普段歩く道というのは、おもしろいものがない場合が多い。しかしその方が、オンラインで処理する情報が少なく、よりリラックスできる。何も、特別な刺激^{しげき}的な風景が広がっている必要はないのです。どんなに刺激的な繁華街^{はんかがい}といえども、車^Hが^I走っている

ところや、人が多くて③騒々しいところでリラックスできる人はあまりいないでしょう。

リラックスできる環境は、表現を変えると退屈な時間、退屈な場所でもあります。しかしどうやら脳は退屈が嫌いではないようです。むしろ「退屈という空白」を補おうと、何かを自発的に作りだそうとします。だからこそ、ひらめく。

そう考えると、退屈というのもひらめきにとつてとても重要な要素なのです。退屈だからこそ、何かを作りだそうと脳が活動する。退屈はひらめきの近道なのかもしれません。

一般にネガティブだと思われる感情も、それなりの意義があるから進化の過程で消えることなく存在し続けているわけですが、「退屈」にもまた、ひらめきを促すという効用があるのです。

先ほども少し触れましたが、ある課題に取り組んでいる過程で脳が活性化するということは、その課題に必要なモード以外のモードが抑制されるということと等価です。基本的に、何かさせさせと仕事をしている状況というのは、逆にそれ以外のモードを強く抑制している状況でもあるのです。仕事や勉強などに追われている時、目の前のこと以外は行わないようにしようと、脳の神経細胞は勝手に判断して、結果として必要のない活動に抑制をかけてしまっているわけです。

ここに、無用の用、退屈の効用があります。特に何の目的もない状態に置かれた時、はじめて脳は自由にいろいろな活動のモードを追求できるのです。

なぜリラックスできる環境でひらめきがおこりやすいのか。

それはつまり、特定の作業のために他のモードを抑制することがなく、脳が自由に活動できる環境にあるから、ひらめきも起こりやすくなるのです。

別の視点から見れば、ひらめく瞬間を作り出す環境というのは、人それぞれであるということも示しています。リラックスする環境は人によって違うわけですから。こう考えると、自分の中でどういう時に、こういった環境でひらめいたのか、よくよく考えてみる事が非常に重要になってきます。

自分なりの、リラックスの方程式、ひらめきの方法論を⁽⁴⁾コウチクする必要があるのです。

(茂木健一郎著『ひらめき脳』より。一部改変)

【語注】

※ 極言 極端に思い切って言うこと。

※ 松下電器 会社名。現在の「パナソニック」。

※ 潜在能力 外にあらわれないで中にひそんでいる能力。

※ 払拭 はらいぬぐうように、すっかりなくすこと。

※ インスピレーション 突然頭の中にひらめく考えや判断。思いもよらない着想。

※ 反芻 くり返しよく考えたり味わったりすること。

※ リアルタイム・オンライン ある出来事が起こると同時に情報が入ってくること。

※ 繁華街 人が多く集まり、にぎやかではなやかな場所や通り。

※ ネガティブ 否定的。消極的。

※ モード ここでは、ある一つの機能を行うための「状態」。

※ 等価 等しい価値。

問一 マズしかった ⁽¹⁾ オトズれた ⁽²⁾ 最寄り ⁽³⁾ コウチク ⁽⁴⁾ のひらがなを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 ① ③ に当てはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア ゴロゴロ イ ガヤガヤ ウ キョロキョロ エ ビュンビュン オ サラサラ

問三 ^A 多くの誤解 とありますがどのような誤解ですか。答えなさい。

問四 本文中の B にあてはまるものとしてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 脳は、その気になればいつでもひらめきを起こすことができます。
 イ 脳は、いつでもきれいで安全な発想をひねり出すことができます。
 ウ ひらめきは、まずしい人に喜びを与えるためにあるものなのです。
 エ ひらめきは、いつかは底をついてしまう限りのあるものなのです。
 オ ひらめきは、だれかの手を借りなければ出てこないものなのです。

問五 ^C よこしまな考え のここでの意味としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 流行にのった新しい考え。
 イ 疑いを持たない素直な考え。
 ウ どうにかなるといふのんきな考え。
 エ 自分に都合のよいずるい考え。
 オ 成り行きにまかせるいちかばちかの考え。

問六 ^D そうしたこと とはどのようなことですか。三十字以内で書きなさい。

問七 ^E 「 」が悪い の「 」には左の□にあてはまる漢字と同じものが入ります。その漢字一字を書きなさい。

(例)

肉	手	
青 道	水 平 屋	
鉄	公	

問八 ^F 「ひらめき」のためには特別な環境や、才能は必要なく、ただリラックスすることが必要である、とありますが、ひらめきにはなぜ「リラックス」が必要なのですか。理由を説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

①

「こつから先は、ふたりに行け。」

おいかがぶさるように、とうさんが助手席側のドアをあけた。いきなりちぎれるように外にひっぱられて、風がうずをまいて車になだれこんできた。潮しほのにおいのするしめった風。前髪まえがみがべたりとおでこにはりついた。汗あせと安物の整髪料せいはいりょうのまざったとうさんのにおいが鼻先をよぎる。いつもだったら大つきらいなにおい。なのに大きく息をすう。鼻腔＊びこういっぱい広がった潮の香りに、むせそうになった。

「……………」

わたしは左足を一步、車の外にふみだした。お気に入りの黒いスカートがパタパタ風にひるがえる。

「行くよ、よしひろ。」

返事はない。

「おい、よしひろ。」

とうさんが腕をのばして、後部座席でリンリンにだきついて丸まっているよしひろを、やさしくゆすった。寝てるんじゃない。さっきまであんなにはしゃいでたんだもん、寝てるわけない。リンリンもなにかを感じたのか、大きく目を見開いてじっと動かずにいた。

わたしは、のろのろと助手席の足もとからリュックサックをひっぱりだした。重くて持ちあがらない。そのあいだも、風はゴーゴーとうなりながら背中をおしつづける。そのままおされたふりをして、シートにたおれこんでしまいたかった。よしひろみたいに丸まって、ダンゴムシになりたい。

「とうさん……………」

どうしても行かんといけんの？ 目だけでたずねた。

顔をあげたとうさんが、小さく首をふった。そして気弱く目をそらせ、もう一度よしひろをゆすった。

「ほら、よしひろ。着いたぞ。」

髪かみが風にあおられてさかだつ。くちびるにはりついた髪の毛は潮の味がした。

わたしは、ゆつくりと周囲を見まわした。岬みさきをまわりこむまでは、ずっと左側にあった日本海が、そこからは見えなかった。「夏音なつのね公民館」。ブルーのペンキのはげかった建物のむこうから波の音だけがひびいてきた。

②

岡山から鳥取へ、中国山地をつきつてきた。リンリンと「緒いっしょの初めてのドライブ」。

「おまえも一緒に行くか？」とうさんがリンリンに声をかけたとき、わたしとよしひろはとびあがってよろこんだ。しずんでた気持ちがいつきにうきたった。いままでは車が毛だらけになるからって、絶対に乗せてくれなかったのに。車が趣味のとうさんは、赤いカラーが唯一＊の宝物だ。店が休みの日には朝から洗車し、何時間もかけてワックスでみがきあげる。内部の紺色こんいろのシートにはいつもほこりひとつついていなかった。

途中、道の駅のレストランでお昼ご飯をたべた。お皿からはみだしそうな大きなエビフライに、「うわ、しあわせ」とよろこんでみせたけれど、かじると先っぽは衣ばかりだった。よしひろが注文したのは、カツ丼かつどん。車で待っているリンリンのために、肉をふた切れおしほりの袋におしこんでいた。とうさんはコーヒーだけ。

「たべないの。」

「胃いの具合がちょっとな。ここのコーヒーは苦いな。」

リンリンにおしっこをさせるために、周囲を散歩した。岡山じゃずっと三十五度をこえていたのに、中国山地のと真ん中はさすがに涼しくて、エノコログサが風にゆれていた。

「リンリン。」

リンリンとよしひろが、草の海でじゃれまわるのを、とうさんはばんやりながめていた。魂たましいのぬけた人みたい。

「アチョー。」

わたしは、とうさんの背中にとびついた。すじばった体を両足ではさんでよじのぼる。上から見ると、とうさんの頭のとっぺんはタンポポの綿毛＊みたいによよよしていた。

「とうさん。はげかけてるよ。」

「わかつとる、そのくらい。お、重たいなあ、おまえ。いったい何キロあるんだ？」

「三十六キログラムです。」

「……十倍かあ。」

よろけながら、タイセイをたてなおしたとうさんは、背中の方をゆすりあげた。

「十倍って？」

「生まれたときのおまえの体重、三千六百グラム。でっかい女の子ですわねって、看護婦さんにほめられた。」

いつもくりかえされる、わたしに関するとうさんの自慢のひと話。うんざりしてるわたしにかまわず、とうさんは鼻の穴をふくらませた。

③

「ここから、鳥取県だつて。」

トンネルの中で県境を越えた。長い長いトンネルをぬけたとたん、空の色が変わった。どんよりねずみ色。わたしたちはとたんに無口になった。ぐるりとまわりじゅう、山、山、山。ねずみ色の空からは、シヨボシヨボした雨がたえまなくふってくる。

「川が反対むきになった。」

よしひろの聲に窓の下をのぞくと、茶色い水が大きな川石の間を、ゴーゴーと音たてて流れていた。

「本当だ。さっきまで後ろに流れてたのに……。」

「分水嶺を越えたな。日本海にむかって流れてるんだ。」

ずっとだまつたとうさんが、ぼつんとつぶやいた。社会科で習った日本地図を頭に思いうかべながら、わたしは生き物のように身をくねらせる川をこわごわのぞきこんだ。

海ぞいの国道九号線にでるころには雨があがつた。そのかわり、空はますます荒れ、モヨウになって、強い横風に車がひっくりかえりそうになる。そのたびリンリンはつめをシートにくいこませ、わたしとよしひろは体を固くした。

「台風が近づいとるんじゃ。」

言いわけをするみたいに、とうさんがいった。

「いつもはこれほどでもない。」

海はおこっていた。沖合いからきどつたホテルのカーテンみたいなひだをつけながらよせてきた波は、防波堤といわず岬の岩場といわずかみついて、そのたびに白い花火のような波しぶきをあげていた。空ではなまり色の雲たちのデスマッチ。窓を少しでもあけると、ゴーともグオーともつかないうなり声が、海と空の両方からおそいかかってくる。

海岸ぞいに、いくつかの集落を通りすぎた。どの集落も波のしぶきに洗われて、霧の中の町みたいにはやけている。——よしひろとふたり、ここに置いていかれる。

閉じこめていた思いがぐんぐん大きくなってラムネの栓みたいのどをふさいだ。息がつまる。「フォックステール」。わたしたちの家。クリーム色の壁でしんちゅう製の風見鶏がくるくるまわっている、小さくてかわいい喫茶店。あそこに帰ろう。とうさん、車をUターンだ。……いえたら、どんなにいいだろう。

④

大っきらいな水泳の最終日をようやくなんとかやりすごし、やっと明日から夏休み！ という夜だった。

「なつき、夏休みのあいだ、よしひろとふたりで鳥取のばあちゃんちに行ってくれんか。」

突然、とうさんがいいだした。なにげをよそおって、でもすっかり青ざめた顔色で。

「えー、なにそれ。」

ばあちゃんの顔もろくに覚えてないのに、なんでそんなところ行くわけ？ 恵理といっぱい約束したのに、どうすんの？ 夏休みのあいだって、ずつつて意味？ パニックになった頭の中をかけめぐるたくさんのクエスチョンマークたちが全部、次のとうさんの言葉ではじけてとんだ。

「店を閉める。もうやっていけん。」

わたしのひざから力がぬけた。水の多すぎた粘土細工みたいにへなっと台所の床にくずれた。

「景気が悪いんは、なつきも知つとるじやろ。」

むろん知っていた。

「働いても働いても借金が増える。もう限界じゃ。」

頭をかかえたとうさんの声が、水の中みたいに遠くひびいた。去年あたりから、店の売れ残りのスパゲティやカレーが夕飯にあてられる日が増えた。そのうちとうさんは、近所にできた二十四時間営業のスーパーに早朝パートにではじめた。それでも、「フォックスター」がつぶれるなんて思いもしなかった。

「おまえとよしひろが夏休みのあいだ、鳥取に行ってくれたら、そのあいだとうさん、生活のたてなおしに集中できる。」

とうさんの言葉に傷ついた。《F》っていわれた気がした。

「……とうさんはやっぱりだらすけじゃ。」

細長い体が食卓のいすからずりおちて、頭を後ろの壁にゴンゴンうちつけた。

「ばあちゃんのいうとおりじゃ。」

——大変なことになった。

とうさんのたてる壁の音が、わたしにそう教えていた。とうさんは、いじめられて泣いて帰ったときのよしひろそっくりだった。

⑤

「ねむたいんじゃー。」

とうとう泣きだしたよしひろの背中に、無理やりにリュックサックをしょわせると、

「道はわかるな。」

真っ白な顔でとうさんはいった。

こくん。ハンシヤ的にわたしはうなずいた。とうさんが、一刻も早くこの場から逃げだしたそうに見えたから。

「じゃな。」「じゃな。」

窓から顔をだしたとうさんは、何度も同じことをいった。リンリンが後部座席の窓ガラスをひつかいて、ワンワンほえた。えっ、めずらし。リンリンがほえるなんて。顔をあげると、リンリンはなぜか必死の目をしてわたしを見ていた。

——早く行つて。

^G 風になぶられた髪の毛が顔をおおってくれているので、助かった。

ブオォー。赤いカラーが坂道を急発進でのぼっていった。窓にはりついてるリンリンの白い顔がみるみる小さくなって、見えなくなった。

^H —— あーあ、行っちゃった。

そのとき、思ってもいなかった心の動きがわたしの中に生まれた。すっとしたのだ。ずっとのをふさぎつけていた栓がぬけて、さばさばしたのだ。

—— ここで、夏を過ごす。

そんな決意と好奇心とが、むくむくとわいてきた。わたしは、もう一度ゆつくりと周囲を見まわした。

(八束澄子著『海で見つけたこと』より。一部改変)

【語注】

※鼻腔……鼻の中の空間。

※カラーラ……車種の名前。

※分水嶺……二つ以上の川の流れを分ける境界となる山。

※デスマッチ……プロレスなどで、どちらか一方が完全に倒れるまで戦う試合。命がけのはげしい戦い。

※しんちゅう……金属の一種。黄色で、さびにくい。

※クエスチョンマーク……疑問符。「？」のこと。

※だらすけ……北陸や山陰の方言で「おろか者」という意味。

問一 綿毛⁽¹⁾ タイセイ⁽²⁾ モヨウ⁽³⁾ ハンシヤ的⁽⁴⁾ の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 B とうさんの背中にとびついた。とありますが、「わたし」はどういうつもりでそうしたのですか。説明しなさい。

問三 C ……十倍かあ。とありますが、この言葉には「とうさん」のどのような気持ちが表れていますか。その説明としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
 ア 「わたし」が予想以上に重かったのでおどろいている。
 イ 「わたし」が元気なことを看護婦さんに感謝している。
 ウ 「わたし」が生まれてからのことをなつかしんでいる。
 エ 「わたし」が育った分自分が年をとって悲しんでいる。
 オ 「わたし」がうそを言っているのだろうと疑っている。

問四 D わたしたちはとたんは無口になった。とありますが、なぜ無口になったのですか。理由としてふさわしくないものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。
 ア だまって集中していないと危険だと思ったから。
 イ 天気が悪くなってきたて気持ちも暗くなったから。
 ウ 目的地に近づいたのがはつきり感じられたから。
 エ 急に周囲の様子が変わったのでおどろいたから。
 オ 以前からの悪い予感が現実のものになったから。

問五 E いえたら、どんなにいいだろう。とありますが、なぜ言えないのですか。説明しなさい。

問六 F 《 》にあてはまる、「……者」という一語を考えて書きなさい。

問七 G 風になぶられた髪の毛が顔をおおってくれているので、助かった。とありますが、なぜ「助かった」のですか。説明しなさい。

問八 H あーあ、行っちゃった。とありますが、このときの「わたし」はどのような気持ちでしたか。それを表すことばとしてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
 ア 未練^{みれん} イ うらみ ウ 後悔^{こうかい} エ あきらめ オ 絶望

問九 A ゆっくりと周囲を見まわした。もう一度ゆっくりと周囲を見まわした。とあります。Aのときとーのときでは、気持ちの上でどういう違いがありますか。説明しなさい。

問十 この文章は、回想をまじえる形になっています。①～⑤の五つの場面を時間の流れにそってならべるとどのようなようになりますか。記号で答えなさい。

受験番号

氏 名

得 点

一

問一

(1)

マズ

しかった

(2)

オトズ

れた

(3)

最寄

り

(4)

コウチク

問二

①

②

③

問三

問四

問五

問六

問七

問八

二

問一

(1)

綿毛

(2)

タイセイ

(3)

モヨウ

(4)

ハンシャ

的

問二

問三

問四

問五

問六

者

問七

問八

問九

問十

